

Title	自己愛性人格に関する一研究(3) : 自己不一致の不安定さとの関係について
Author(s)	相澤, 直樹
Citation	大阪大学教育学年報. 6 P.211-P.222
Issue Date	2001-03
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7310">https://doi.org/10.18910/7310</a>
DOI	10.18910/7310
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 自己愛性人格に関する一研究 (3)

### - 自己不一致の不安定さとの関係について -

相澤直樹

#### 【要旨】

本研究では、自己愛性人格と現実自己-理想自己間不一致(自己不一致)の不安定さとの関係を検討した。主な仮説は、自己愛性人格の二特性、すなわち、誇大性特性と過敏性特性が共に自己不一致の不安定さと正の相関をもつというものであった。まず、一般青年に見られる二つの自己愛性人格特性を測定するために、ナルシシスティック・パーソナリティ・インベントリー(NPI)と対人恐怖心性尺度が用いられた。また、自己不一致の不安定さを評価するために、日常生活内で被験者の自己不一致を繰り返し測定する手法が実施された。その結果、NPIでは、「特権性・特殊性」因子で「向性」「過敏性」の側面における不安定さとの間に有意な結果が得られた。また、同じ「虚栄性」因子で、「強韌性」「過敏性」の側面における不安定さとの間に正の相関関係が示された。一方、対人恐怖心性尺度では、「否定的な公的自意識」因子において「向性」「情緒安定性」「誠実性」の側面の不安定さとの間に正の相関関係が見出された。以上の結果について自己愛性人格構造の視点から考察を行ない、最後に今後の展望を論じた。

#### 1: 自己愛性人格とは?

ナルシストという概念は一般によく用いられるものであり、その実態は一見明白なように思われる。それゆえ、その性格的側面を指す自己愛性人格という概念も簡潔なように思われるかもしれない。しかし、その実像を把握することは予想以上に困難である。

自己愛性人格に関する心理学的研究の一つの起点として、1970年代から80年代にかけてアメリカで隆盛を極めた自己愛性人格障害の研究を挙げることができる。その代表的研究者としてO.KernbergとH.Kohutがいる。Kernberg(1975)は、M.MahlerやE.Jacobsonの自我発達理論とM.Kleinを中心とする対象関係論の流れを汲み、自己愛性人格障害を病的に発達した誇大自己に起因するものと論じている。一方、Kohut(1971,1974)は、独自に構築した自己心理学理論に基づいて自己愛性人格障害を健康な自己愛の発達停滞として論じている。双方独自の観点から理論を展開しているが、それだけではなく自己愛性人格障害の疾患像においても大きく異なっている。Kernbergは、誇大的で野心的、賞賛願望、他者への無関心などを中心とする疾患像を提示しており、これは今日のDSM(『精神疾患の分類と診断の手引き』)が提示する自己愛性人格障害の診断基準と概ね一致するものである。それに対し、Kohutは、誇大的で野心的なものだけでなく、抑うつ的で自発性の欠ける疾患像もその中に含めているし、提示された事例としては心気症や性倒錯といったものまで含まれている。両者は診断基準の視点が異なるために単純に比較できないが、ここにおいて自己愛性人格障害の概念が大きく拡大されたことは間違いないであろう。

このような概念の拡大に対し、記述的な観点から一つの下位分類を提示したのがG.Gabbard(1994)である。Gabbardは、自己愛性人格障害を単一の疾患像に限定されるものではなく、傲慢さや自己中心性、他者への無関心さを中心とした「無関心型」と、自己抑制や傷つきやすさ、対人回避性を中心とした「過剰警戒型」を両極とする連続体線上に位置付けられるものとした(表1)。その他にもさまざまな下位分類が提示されているが、過剰警戒型にあたる下位分類が共通して多く見られる。たとえば、J.Masterson(1981)の「秘密の自己愛者」やWink(1991)の「密かな自己愛者」などがそれにあたる。その意味で、Gabbardの分類は一般化しうる妥当性のあるものと判断できる。

ところで、自己愛性人格として無関心型と過剰警戒型を取り上げるとして、また別の問題が生じてくる。実は、両特性は一見全く異なる行動特徴を示しており、むしろ部分的には正反対とっていいほどの相違

(表1) 自己愛性人格障害の2つのタイプ (Gabbard1994)

周囲を気にかけない自己愛的な人 (oblivious narcissist)	過剰に気にかける自己愛的な人 (hypervigilant narcissist)
1. 他の人々の反応に気づくことがない。 2. 傲慢で攻撃的である。 3. 自己に夢中である。 4. 注目の中心にいる必要がある。 5. 「送信者であるが、受信者ではない」。 6. 明らかに、他の人びとによって傷つけられたと感じることに鈍感である。	1. 他の人びとの反応に敏感である。 2. 抑制的で、内気で、あるいは自己消去的でさえある。 3. 自己よりも、他の人々に注意を向ける。 4. 注目的になることを避ける。 5. 侮辱や批判の証拠が無いかどうか、注意深く、他の人々に耳を傾ける。 6. 容易に傷つけられたという感情を持つ。羞恥や屈辱を感じやすい。

が見られるのである。そのため、「では自己愛性人格とはいったいどのようなものか」という疑問が生じるのである。丸田 (1995) は R.Stolorow の議論を参考にこの問題に触れ、Kohut が取り扱ったような過敏な患者を「自己愛的に傷ついた患者」と呼称し、DSM が診断基準としている誇大的な自己愛性人格障害と区別する、近年の自己心理学の動向を紹介している。これをそのまま援用すると、自己愛性人格から過剰警戒型の特徴は除外されることになる。しかし、心的障害の診断基準の一つであり外的一貫性と集約性が重視される自己愛性人格障害という概念と、より一般的に広い性格特徴を意味する自己愛性人格という概念を必ずしも同列に論じることはできない。後者に関しては、二つの相反する特性が共存したり、二特性の強弱の程度に個人差が見られたりすることを制限する根拠はないであろう。仮に無関心型のみを取り上げるならば、自己愛性人格の「傷つきやすさ」に関する特徴がほとんど取り上げられないことになりかねない。この「傷つきやすさ」の問題が極めて重要な要因であることを考慮すると、その現れである過剰警戒型の諸特徴をも含めて論じるほうが妥当であると考えられる。

以上の考察から、本研究では自己愛性人格として Gabbard の二つの下位分類に従い、誇大的・万能的な類型と過敏的・対人回避的な類型を取り上げることとする。しかし、この下位分類は、丸田 (1995) が「振り子の両極」と指摘しているように、類型と言うよりも自己愛性人格の主要な二特性とするほうが妥当であろう。そこで、以下では Gabbard の無関心型を「誇大性特性」、過剰警戒型を「過敏性特性」と呼称することにする。

## 2: 人格構造論

しかし、なお「自己愛性人格とはいったいどのようなものか」という疑問は残る。表面に現れる特徴が不安定であったり矛盾していたりするのであれば、外的な特徴だけで「こういうものが自己愛性人格である」と明示するのは困難なことになるからである。そこで、表面的特徴の背後にある、目に見えない人格構造というものを論じる必要が生じる。従来、自己愛性人格 (障害) についてはさまざまな観点からその人格構造が論じられてきた。本研究では、過敏性特性を含めた自己愛の人格構造を論じた岡野による考察を取り上げたい。

岡野 (1998) は、J.Sandler による恥の精神分析的考察をもとに自己愛性人格障害について論じている。それによると、自己愛性人格障害とは、極端に理想化された「理想自己」と、それに比して過小評価された現実の自己像である「恥ずべき自己」との二極構造により生じるものとされる。つまり、この両極性が顕著になった場合、一方においては、理想自己への同一化傾向が自尊感情の極端な高揚をもたらすが、この高望みは理想とかけ離れた「恥ずべき自己」への直面化を急激にもたらす。そのため、自己像はこの2つの非現実的な自己像の間で揺れ動くことになり、現実的な評価に安定することができない。このことが自己愛性人格障害の諸症状を形成する。そして、この理想自己と恥ずべき自己のどちらが優勢に体験されるかによって、誇大型と過敏型に分かれるものと論じている。先行研究との比較から言えば、極端に理想

化された理想自己の背景でそれを駆動しているのがKohutの蒼古的誇大自己やKernbergの病的誇大自己、Mastersonの誇大自己-万能対象融合単位に相当し、現実自己への直面化によってもたらされる状態がKohutの「自己の断片化」やMastersonの「攻撃的で空虚な対象関係融合単位の活性化による見捨てられ抑うつ」に相当するものと言える。以上の岡野の理論は、自己愛性人格を力動心理学的に説明するだけでなく、誇大性特性と過敏性特性の人格構造を簡潔に説明しうる点で優れていると思われる。つまり、極端な理想自己が主に支配的である場合、表面的には誇大性の人格特性が生じてくるであろうし、恥ずべき自己が主に意識されている場合には、過敏性のそれが表面化するであろう。その結果、同一の人格構造を有しているにもかかわらず、表面上は一見正反対とも取れる特性が生じてくると推測されるのである。

本研究では、以上の仮説的な人格構造論を心理学的な調査研究の上から検討したい。そこで、自己愛性人格と理想自己-現実自己不一致(自己不一致)の不安定さの関係を検討することとした。自己愛性人格の誇大性については、従来RaskinとHall(1979)のナルシシスチック・パーソナリティ・インベントリー(NPI)が用いられることが多かったので、今回もそれを用いた。一方、過敏性に関しては、筆者の知る限り妥当な尺度が未開発な段階にあるが、さまざまな研究者により対人恐怖との類似性が指摘されている(岡野1998, 近藤1995)。それゆえ、相澤(1997)の対人恐怖心性尺度を用いることとした。ただし、両者は完全に同一のものではなく、例えば対人恐怖に特有の緊張・赤面などの身体的表現は必ずしも過敏性特性に含まれるものではない。それゆえ、上の尺度から過敏性特性に含まれない特徴の項目を削除することも考えられた。しかし、統計上の手段に拠らずに尺度項目を変更することには問題が懸念されたし、尺度全体が一つのものとして作成されていることも考慮して、本研究では全項目を用いることとし、結果の段階で過敏性特性との異同も含めて考察することとした。

### 3: 方法

本研究では、自己愛性人格の特性として誇大性特性と過敏性特性の二つを取り上げた。前者の測定尺度としては、RaskinとHall(1979)によるナルシシスチック・パーソナリティ・インベントリー(NPI)を用い、後者の測定尺度としては相澤(1997)による対人恐怖心性尺度を用いた。また、自己不一致の不安定さの測定については、現実自己および理想自己を反復評定する方法を用いた。測定項目としては、長島ら(1967)のSelf-Differential尺度大学生用47項目のうち因子負荷量が高い16項目を用いた。そして、被験者に対して規定時刻(およそ18時~24時)に両者を評定してもらうことを5日間分繰り返すように求めた。

## 4: 結果

### A. 調査期間と調査対象

本調査は1997年6月~11月の期間に実施された。当初本調査では1, 2日期間があくことを条件として容認し対象に質問紙を配布したが、その条件でも5日間分をすべて評定することが困難な者がいることが明らかになった。そこで一週間以内に4回以上反復評定を行っているものを分析に採用した。構成は一般青年男女139名(男性55女性84; 平均年齢21.3歳)となった。

### B. 因子分析

本調査の被験者数では、各尺度の因子分析を実施する上では被験者数の不足が懸念された。そこで、同時期に平行して行っていた同様の質問紙調査(反復評定期間が2日間のもの)から得られたデータと併せて、272人の回答結果をもとに因子分析を行った。

①NPI・・・項目分析(度数分布、項目-総得点間相関の検討)を行った結果、15項目が削除された。残りの39項目に対し斜交回転(プロマックス法)による主成分分析を施した結果、内容的に妥当なものとして5因子構造が抽出された。負荷が0.35以下の6項目を削除し、再度主成分分析を施して5因子構造

が確定された(表2)。信頼性係数( $\alpha$ )は0.82であった。

(表2) NPIの主成分分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5
<b>第1因子「権威願望・注目願望」</b>					
44. 私は、注目的になってみたいという気持ちがある	.70	.24	.31	.33	-.01
12. どちらかと言えば、注目される人間になりたい	.64	.25	.43	.42	.02
38. 私は支配欲が強い方だと思う	.62	.40	.23	.22	-.05
13. 私は必ず成功してみせる	.61	.16	.21	.29	.08
48. 私はえらい人だと賞われる人間になりたい (他6項目)	.58	.34	.08	.19	-.04
<b>第2因子「統率性・他者の操作」</b>					
15. 私は良いリーダーになれる自信がある	.29	.79	.13	.35	.40
47. 私はもともとリーダーになるのが性に合っている	.33	.68	.17	.42	-.01
19. 自分の思い通りに人を動かすことは、それほど難しいことではない	.17	.54	.25	.41	.11
14. 私は才能に恵まれた人間だと思う (他3項目)	.26	.53	.13	.35	.40
<b>第3因子「顕示性」</b>					
21. 私は自分の体を人に自慢したいという気持ちがある	.22	.23	.69	.15	.08
42. 私は顔を見るのが好きだ	.26	-.10	.69	.02	.16
19. 私は自分の体を見るのが好きだ (他3項目)	.07	.37	.66	.15	.14
<b>第4因子「主張性・顕示性」</b>					
33. いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	.16	.24	.20	.77	.17
32. 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる (他2項目)	.12	.10	.24	.63	.37
<b>第5因子「特権性・特殊性」</b>					
49. 私が言えば、どんなことでもみんな従ってしてくれる	.09	.13	.09	.00	.64
22. 私には、人の気持ちをずばり読み取る力があると思う	.19	.02	.09	.31	.61
41. 人に賞かれるのは、私自身にどこか能力的なところがあるからだと思う (他2項目)	.06	.14	.21	.00	.50

②対人恐怖心性尺度・・・NPIと同様の項目分析をおこなったが、問題のある項目は見られなかった。そこで、全項目対し直交回転(バリマックス法)による主成分分析を施した結果、内容的に妥当なものとして6因子構造が抽出された。負荷量が0.4以下の3項目を削除し、再度主成分分析を施して6因子構造が確定された(表3)。信頼性係数は0.93であった。

(表3) 対人恐怖心性尺度の主成分分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
<b>第1因子「対人場面における違和感」</b>						
03. 人と心を聞いて接することができない	.83	.07	.09	.18	.15	.02
26. 人と心から打ち解けて話すことができない	.81	.06	.13	.08	.12	.11
01. 人と本当になじめない	.72	.21	.12	.25	.14	-.07
10. 人と自然につき合えない (他3項目)	.65	.26	.26	.13	.25	.19
<b>第2因子「否定的な公的自意識」</b>						
24. 人が集まって笑いあっているとき、自分のことが笑われているように思えてしまう	.09	.73	.14	.05	.06	.02
30. 周りの人に、自分が変な人に見られているのではないかと不安になる	.05	.67	.13	.48	.00	.08
07. 人といると、自分の表情などが変ではないかと、強い不安を感じる	.27	.55	.17	.17	.06	.08
35. 何か注意されたらちょっと恥られただけで気が振舞いじめになる (他3項目)	.17	.53	-.02	.25	.17	.04
<b>第3因子「異性に対する心的苦痛」</b>						
37. 異性の人と苦げできない	.24	.10	.83	.12	.06	.16
38. 異性といると、特に緊張する	.16	.15	.80	.07	.08	.26
11. 異性に近づきたいにもかかわらず、避けてしまう (他2項目)	.20	.05	.70	.24	.19	.14
<b>第4因子「他者優位」</b>						
23. 自信が持てず相手次第になってしまう	.09	.19	.21	.62	.17	.17
32. 周りの人に認められたいができない	.14	.22	.19	.62	.06	.13
31. 人との話に聞き、話せなくなるこゝろがありがたしい (他2項目)	.26	.13	.36	.57	.13	.05
<b>第5因子「多数に人に対する心的苦痛」</b>						
09. 人が大勢いると、圧迫されてしまう	.04	.15	.15	.07	.78	.13
13. 人が集まっているところには行きづらい	.31	.11	.15	.02	.72	.05
<b>第6因子「対人場面における身体反応」</b>						
18. 人といるとき、顔がこわばったり赤くなったりして緊張する	.10	.15	.12	.16	.07	.81
16. 人と対峙するとき、顔がこわばったり赤くなるのではないかと怖い (他1項目)	.14	.12	.16	.23	.27	.70

### C. 自己不一致の不安定得点

長島の6因子構造(向性・情緒安定性・強靱性・誠実性・過敏性・理知性)に基づき、各回の側面ごとの自己不一致得点(絶対値)を算出した。そして、その4~5日分の被験者内標準偏差値をもって不安定さの測度とした。平均値と標準偏差値を(表4)に示す。

(表4) 自己不一致不安定性得点の平均と標準偏差値

	向性	情緒安定性	強靱性	誠実性	過敏性	理知性
平均値	1.42	1.47	1.63	1.24	1.16	1.13
標準偏差値	0.78	0.83	0.96	0.64	0.64	0.58

### D. NPIと対人恐怖心性尺度の相関

NPIと対人恐怖心性尺度の相関係数を(表5)に示す。ほとんどが負の相関関係、あるいは、無相関関係を示した。この結果は、外的に意識される行動特性としては、両者には積極的な正の関係が見られないことを示している。その意味で、自己愛性人格における誇大性特性と過敏性特性の外見的な無関係さ・正反対さを示唆する結果と言える。

(表5) NPIと対人恐怖心性尺度の相関

	NPI総得点	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
対人恐怖総得点	-.412**	-.247**	-.372**	-.145	-.444**	-.232**
第1因子	-.233**	-.093	-.176*	-.152	-.246**	-.201*
第2因子	-.188*	-.040	-.234**	-.048	-.229**	-.186*
第3因子	-.393**	-.299**	-.363**	-.081	-.417**	-.144
第4因子	-.425**	-.255**	-.388**	-.122	-.467**	-.260**
第5因子	-.421**	-.360**	-.328**	-.118	-.428**	-.119
第6因子	-.300**	-.154	-.279**	-.178*	-.317**	-.131

### E. NPIと自己不一致の不安定さとの関係

NPIの各下位因子得点と各側面の自己不一致の不安定得点との相関係数を(表6)に示す。第3因子「虚栄性」で「向性」「過敏性」との間に、第5因子「特権性・特殊性」で「強靱性」「過敏性」との間に、弱いながらも不安定さとの間に正の相関関係が検出された。前者の結果は「虚栄性」の強い人ほど「向性」と「過敏性」の側面における自己不一致の不安定さが高く見られることを示している。後者の結果は、「特権性・特殊性」が強い人ほど「強靱性」と「過敏性」の側面における自己不一致の不安定さが高く見られることを示している。

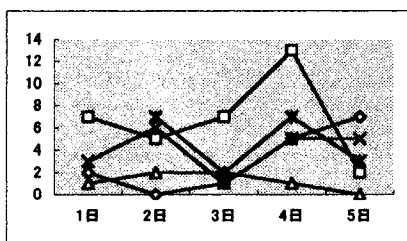
以上の結果は、自己不一致の変動を標準偏差値に換算したものであり、実際の変動の様子を検討するには限界があると考えられた。そこで参考として、各因子得点の高得点者・低得点者を少数選択し、事例的にその様相を検討することも有意義であると思われた。各因子得点の上位・下位各10位までを抽出し、自己不一致の変動の様子をグラフ化して検討した(グラフの錯綜を回避するために、各5位までを図1に示す)。その結果、上位群にもあまり変動を示さないものが見られたし、逆に下位群でも大きな変動を示すものが見られた。しかし、下位群では上位群に比べて急激な変動が少なく、一時的な変動を除けば概ねなだらかな曲線的・連続的変動であり、日常的経験が穏やかに自己像に影響を与えている様子が伺われた。それに対し、上位群ではグラフ上でジグザグ的・非連続的変動が下位群より多く見られ、自己像が理想自己像への接近と離反を繰り返している様子が観察された。

(表6) NPIと自己不一致不安定性得点との相関

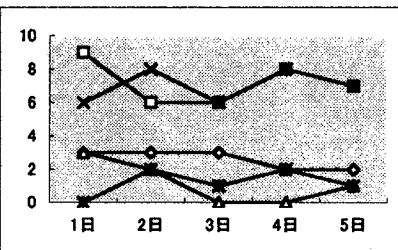
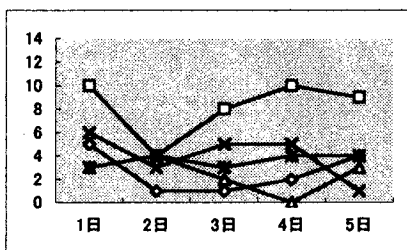
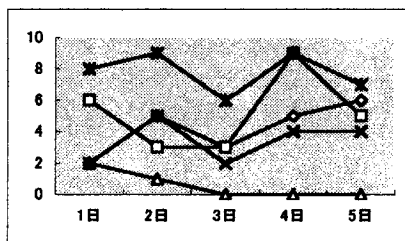
	向性	情緒安定性	強靱性	誠実性	過敏性	理知性
NPI第1因子	.123	.072	.105	.101	.112	-.044
第2因子	.100	.098	.184*	.168	.090	.050
第3因子	.288**	.197*	.170	.052	.233**	.005
第4因子	.033	-.090	.152	-.079	.080	-.149
第5因子	.074	.081	.279**	.094	.234**	.084

(図1) NPIの因子得点上位群・下位群による自己不一致の変動の様子(上:上位群 下:下位群)

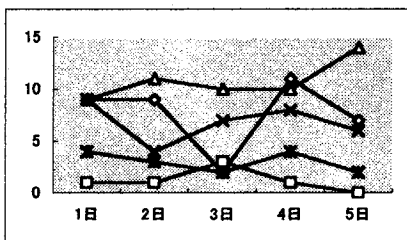
a.第3因子の上位群・下位群/「向性」の自己不一致得点



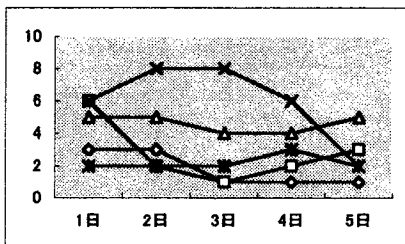
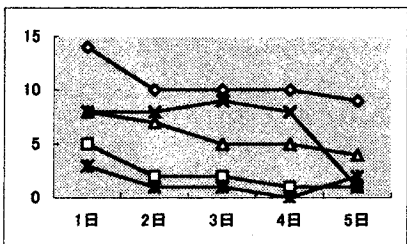
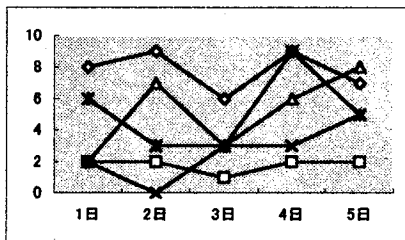
b.第3因子の上位群・下位群/「過敏性」の自己不一致得点



c.第5因子の上位群下位群/「強靱性」の自己不一致得点



d.第5因子の上位群下位群/「過敏性」の自己不一致得点



## F. 対人恐怖心性尺度と自己不一致の不安定さ

対人恐怖心性尺度の各下位因子得点と各側面の自己不一致得点との相関係数を(表7)に示す。その結果、第2因子「否定的な公的自意識」において、自己不一致の「向性」「情緒安定性」「誠実性」との間に弱いながらも正の有意な相関が検出された。この結果は、「否定的な公的自意識」を強く抱いている人ほど、「向性」や「情緒安定性」、「誠実性」の側面における自己不一致が不安定であることを示唆している。

NPIと同様に、第2因子における高得点者・低得点者各10名を抽出し、補足的に自己不一致の変動の様子を検討した(各5位までを図2に示す)。ここでも、上位群・下位群ともに大きな変動をしめすもの、あまり変動を示さないものが見られた。しかし、下位群では上位群よりもほぼ水平的な推移を示すものが多く、その中に一時的に大きな変動を示すものが1、2名含まれていて、自己不一致が比較的安定している様子が伺われた。それに対し、上位群では水平的な推移は少なく、一時的に大きな変動を示すものやジグザク的な変動を示すものが下位群よりも多く見られた。その意味では、自己不一致の不安定な様相が観察されたものと思われる。

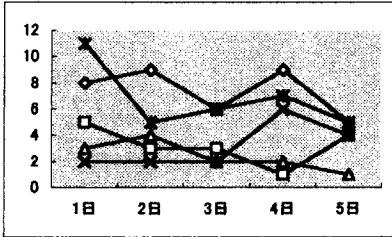
(表7) 対人恐怖心性尺度と自己不一致不安定性得点との相関

	向性	情緒安定性	強靱性	誠実性	過敏性	理知性
対人恐怖						
第1因子	-.020	.105	-.017	-.077	-.107	.010
第2因子	.228**	.232**	.058	.304**	.078	.077
第3因子	.105	.072	-.135	.109	-.196*	.041
第4因子	.108	.097	-.043	.128	-.039	.159
第5因子	.011	.006	-.083	-.038	-.142	.113
第6因子	-.038	.026	-.228**	.000	-.098	-.023

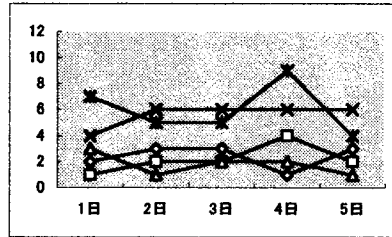
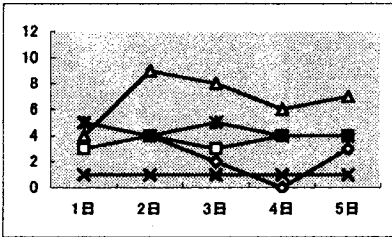
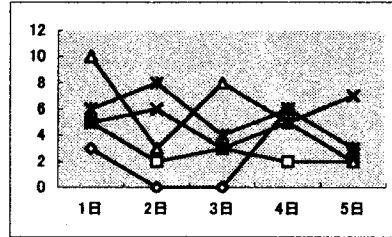


(図2) 対人恐怖心性尺度の因子得点上位群・下位群による自己不一致の変動の様子  
(上:上位群 下:下位群)

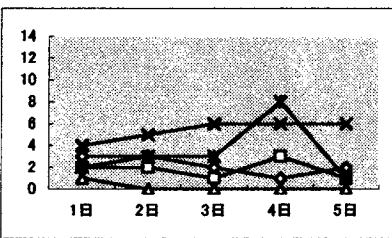
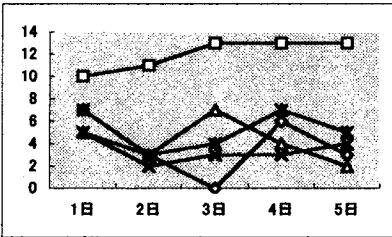
a.第2因子の上位群下位群/「向性」の自己不一致得点



b.第2因子の上位群下位群/「情緒安定性」の自己不一致得点



c.第2因子の上位群下位群/「誠実性」の自己不一致得点



5: 考察

A. NPI と自己不一致の不安定さとの関係

本研究では、自己愛性人格の誇大性と自己不一致の関係を検討するために、NPIと自己不一致の不安定さの関係を検討した。その結果、第3因子「虚栄性」においては「向性」「過敏性」の自己不一致の不安定さとの間に、第5因子「特権性・特殊性」においては「強靱性」「過敏性」の不安定さとの間に、弱いながらも有意な正の相関が検出された。この点に関しては次のように考えられる。まず、第3因子「虚栄性」は、自分の外見に対する肯定的な評価への関心を意味する項目からなり、自他から肯定的に評価される自分への関心の高さを示している。人格構造論上では、理想自己が優位な状態にある人の特徴であると思わ

れるが、自他の評価を気にしている点で自己への不安が多少なりとも意識されており、その意味ではNPIの中でも過敏性に近い特徴であると言える。一方、第5因子「特権性・特殊性」は、現実的な根拠が希薄な自己の理想化を意味する項目で構成され、理想自己の影響をもっとも強く受けており、現実的な自分への関心が希薄であることが伺われる。その意味で、NPIの各因子の中でも特に誇大的な特徴であると言える。その他の第1因子「権威願望・注目願望」、第2因子「統率性・他者の操作」、第4因子「主張性・顕示性」は、理想的な自分を具体的に他者場面で実現しようとする願望・期待を示している。かなり理想的な自己像を抱えている点で誇大性的であることには変わらないが、第3因子のような恥ずべき自己への不安も見受けられにくいし、第5因子のように現実との接点の希薄さも伺えない。その意味では、かなり理想的な自己にも匹敵するような現実的な自己を実現しようとする人物が示す特徴であるとも考えられ、誇大性特性の中でも健康的・創造的な特徴を反映するものと考えられる。以上のように考察すると、本研究の結果は、NPIの中でもやや過敏性に近い因子と特に誇大性的な因子において、それぞれ有意な結果が得られたものと考えられる。

因子別の結果について考察すると以下のことが言える。まず、第3因子「虚栄性」と「向性」に関係が見られたのは十分予測される結果であると言える。あまりに理想的な向性を求める人は、対人場面において容易に理想と異なる自分に直面することになるであろう。そして、そのような恥ずべき自分を否認し理想的な自己像を守るために、外見や衣服に満足を見出そうとすることは十分に考えられるからである。その連関が本結果につながったものと思われる。また、「過敏性」の側面と有意な結果が見られた点については、次のように考えられる。「過敏性」とは脆弱さ・弱さを意味する自己の側面であり、この側面で極端な理想を求める人は、日常生活で直面する現実的な自分を恥ずべきものとして受け入れがたく感じるであろう。そのため、それを否認し理想的な自分を守るために、外見や服装へのこだわりで没頭することになると考えられる。以上の連関が本結果につながったものと思われる。また、第5因子「特権性・特殊性」において「強韌性」と「過敏性」との間に有意な結果が見られた点については、この「強さ-弱さ」に関する理想自己の高さの影響が一貫して見られた結果であると考えられる。それは、この因子の内容が特別な万能さを意味する点で、より「強さ-弱さ」に関係するものであるからであろう。一般に、強さや弱さの側面で理想的な自分を強く求める人は、日常的な生活経験の中での現実的な自分を恥ずべきものとみなさざるを得ないであろう。それゆえに、自分の特権性や特殊性に関する非現実的な思い込みをもって、恥ずべき自分を否認し理想的な自分を保持しようとすると考えられる。このような連関が本結果に現れたものと推測される。

以上のように考察すると、それぞれ第3因子と第5因子に関連の深い側面で有意な相関が見出されたと言える。しかし、全般的には有意な結果は少なく、論理的に予測される他の関連も検出されていない。その点には、今回の研究が日常生活での変動を測定したために条件統制が困難であったこと、また、5日間連続で測定することが実質的に困難であったため、被験者によって測定期間に差異が生じてしまったことの影響が考えられる。

## B. 対人恐怖心性尺度と自己不一致の不安定さ

本研究では、自己愛性人格の過敏性と自己不一致の不安定さとの関係を検討するために、対人恐怖心性尺度と自己不一致の不安定さの関係を検討した。その結果、第2因子「否定的な公的自意識」にのみ、「向性」「情緒安定性」「誠実性」の不安定さとの間に有意な正の相関が見出された。この点については次のように考えられる。第2因子は、他者の否定的な評価への不安・恐れを意味する項目群であり、Gabbardの過剰警戒型の描写と比較してもその主な特徴ともしっかりと対応している。人格構造論上からも、恥ずべき自己への関心の集中は当然他者からの否定的な評価への不安へつながると考えられ、自己愛性人格構造から一次的に生じる特徴として理解できる。第4因子「他者優位」もほぼ同程度に過敏性特性と対応するものと考えられる。それに対し、第1因子「対人場面における違和感」は、「対人場面で自然にふるまえない」「打ち解けられない」などの項目であり、否定的な自己という意味合いは必ずしも含まれない。むしろ、対人場面でも何ら気兼ねなく振舞えることを前提としている分では、理想化された自己の影響が伺

れる。その意味で、対人恐怖心性尺度の中でも誇大性特性に近い特性であると言える。また、その他の第3因子「異性に対する心的苦痛」、第5因子「多数の人に対する心的苦痛」、第6因子「対人場面における身体反応」は、緊張や赤面など身体生理的反応に関する項目であり、普通対人恐怖の中核的な特徴となるものである。これらの特徴は、それが恥ずべき自己の露呈としての意味を持ちうることを考慮すれば過敏性特性の一つの現れであると言える。しかし、そこには対人恐怖特有の身体的・生理的過敏さという別の要因が関与していることが予想され、かつ、必ずしも極端な理想自己を持たない人でも赤面や手の振るえなどは不安の対象になりうる。その意味で、これらの因子は過敏性特性に特有のものではなく、身体生理的な過敏さゆえにそれを恐れるだけの人も含め、広く対人場面における身体生理的表出に悩む人の特徴をとらえるものと言える。以上のように考察すると、本結果は、対人恐怖心性尺度の中でも過敏性特性ともっとも直接的に対応する因子の一つで有意な結果が得られたものと言える。

次に各側面との関係については以下のように考えられる。まず、他者の評価への過敏さを意味するこの因子で、「向性」との間に有意な関係が見出されたのは妥当なものであると思われる。「向性」は対人関係に直結する特性であり、そこで理想的な姿を求める気持ちが強いと現実の自分を恥ずべきものと感じざるを得ない。そのとき恥ずべき自分に意識が集中すると、他者からの否定的な評価を予期することになり、第2因子に現れるような不安が高まると推測される。また、「情緒安定性」との関係では以下のように考えられる。情緒面における理想的な安定を望む気持ちが強いと、ちょっとした動揺・緊張も許容できなくなるであろう。特に対人場面においてはある程度の緊張や動揺は避けがたいと思われるので、対人場面は常に恥ずべき自分の露呈として体験されやすい。そのため、周囲からの否定的な反応を予測する不安が高まるものと考えられる。一方、「誠実性」との間に有意な関係が見出されたのは意外と思われるかもしれない。しかし、実際は「誠実な－不誠実な」「まじめな－ふまじめな」「清潔な－不潔な」という項目で構成されており、そこには自分の清潔性・潔白性という内容が含まれている。それゆえ、この側面で理想が高すぎると、現実の自分は不潔な・不潔なものとして感じ取られるという結果をもたらす。そのことが前述の場合と同様に、他者からの否定的評価への不安につながるものと考えられる。

以上のように考えると、本研究ではある程度論理的に妥当な関連が見出されたと言える。しかし、その他の関係が予測されなかったわけではない。特に対人恐怖については、内沼(1997)が「強力性と無力性の二面的矛盾性」として指摘したような、強さと弱さに関する不一致の影響が予測されるにもかかわらず、結果が見出されなかった。それらも含めて、ここでも条件統制の問題、測定期間の差異などの影響が考えられる。また、過敏性を測定する尺度として対人恐怖心性尺度を用いたことの影響も考えられる。前述のように、対人恐怖心性に過敏性の特性が密接に関連しているにしても、いくつかの相違点がある。そのような尺度上の問題が有意な結果の少なさにつながった可能性も考えられる。

### C. 自己愛心性と自己不一致の不安定さ

本研究の結果は部分的に仮説を支持するものであり、全般的に有意な結果が得られたわけではない。しかし、一見相反するような自己愛性人格の誇大性特性と過敏性特性に、自己不一致の不安定さという共通の特徴を見いだした点では有意なものであると思われる。つまり、誇大で傲慢な誇大性特性に、向性・強靱性・過敏性の側面において自己不一致の不安定さが見られたことは、外的には理想的に見える自己像の背後に、それとはかけ離れた恥ずべき自己像が潜んでいることを示唆している。一方、内気、他者反応への過敏さなどを示す過敏性特性に、向性・情緒安定性・誠実性の側面において自己不一致の不安定さが見られたことは、外見には否定的に見える自己像の背後に、それとはかけ離れた理想的な自己像が影響を及ぼしていることを示唆している。その意味で、「極端に理想化された理想自己」と「それに比して否定的に評価された恥ずべき自己」の対立という人格構造論を支持するものであり、また、誇大性特性だけでなく過敏性をも自己愛性人格に包含することの理論的妥当性を支持するものであると考えられる。

## 6: 総括と今後の展望

本研究では、理想自己と恥ずべき自己の両極的な自己愛性人格構造を検証するために、NPI・対人恐怖心性尺度と自己不一致の不安定さとの関係を検討した。その結果、仮説を部分的に支持する結果が得られた。この結果は、一見相反するような誇大性と過敏性の特性の背後に、理想自己と恥ずべき自己の両極性という構造上の共通性を見いだした点で意義あるものと考えられた。また、誇大性だけでなく過敏性をも自己愛性人格に包含する理論的妥当性を支持する結果でもあると考えられた。しかし、有意な結果が限られたものとなったことには、被験者の条件統制などの実施上の問題の影響も考えられた。また、特に過敏性の特性に関しては、その尺度が未開発であるという問題点が浮き彫りになった。今後は過敏性の特性も含め、より包括的な自己愛性人格項目群の開発が必要であると考えられた。

### <参考文献>

- 相澤直樹. 1997. 「対人場面における対人恐怖的な悩みの分析」『日本教育心理学会第39回総会発表論文集』p.548.
- Gabbard, G.O. 1994. *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: The DSM-IV, Dynamic Approach to Axis II Disorders*. American Psychiatric Press. 館哲朗監訳. 1997. 『精神力動的臨床精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床編: II 軸障害』岩崎学術出版社.
- Kernberg, O.F. 1975. *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. Jason Anderson.
- Kohut, H. 1971. *The Analysis of the Self*. International Universities Press Inc. 水野信義・笠原嘉監訳. 1994. 『自己の分析』みすず書房
- Kohut, H. 1977. *The restoration of the Self*. International Universities Press. 本城秀次・笠原嘉監訳. 1995. 『自己の修復』みすず書房
- 近藤三男. 1995. 「自己愛型人格障害の症候学」『精神科治療学』10(11):pp.1223-1229.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道. 1967. 「自我と適応の関係についての研究(2)—Self-Differentialの作成」『東京教育大学教育学部紀要』13:pp.59-83.
- 丸田俊彦. 1995. 「自己愛型人格障害」『精神科治療学』10(3):pp.273-279.
- Masteron, J.F. 1981. *The Narcissistic and Borderline Disorders*. Brunner/Mazel. 富山幸佑・尾崎新 訳. 1990 『自己愛と境界例』星和書店
- 岡野憲一郎. 1998. 『恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで—』岩崎学術出版社.
- Raskin, R. & Hall, C.S. 1979. "A Narcissistic Personality Inventory." in *Psychological Reports* 45:p.590.
- 内沼幸雄. 1997. 『対人恐怖の心理—羞恥と日本人』講談社学術文庫.
- Wink, P. 1991 "Two Faces of Narcissism." in *Journal of Personality and Social Psychology* 61(4):pp.590-597.

## A Study on Narcissism (3)

### -The Relation to Instability of Self-Discrepancy-

AIZAWA, Naoki

This study examined the relation between narcissistic personality and instability of real-ideal self discrepancies (self-discrepancies). The main hypothesis was that unstable self-discrepancies would be associated with both oblivious and hypervigilant traits of narcissistic personality. Narcissistic Personality Inventory (NPI) and "Taijinkyofu (Fear of interpersonal relationships)" scale were used to assess these two traits of narcissistic personality in adolescents. A measure of instability of self-discrepancies was derived from repeated assessments of global current self-discrepancies in naturalistic contexts. The results as follows: "Entitlement/Superiority" from NPI was positively correlated with instability in "Extraversion-Introversion" and "Sensitivity", "Vanity" from NPI was positively correlated with instability in "Sensitivity" and "Strength", and "Negative Public Self-Consciousness" from Taijinkyofu scale was positively correlated with instability in "Extraversion-Introversion", "Emotional Stability", and "Sincerity". The findings were discussed from the perspective of narcissistic personality organization and further exploration was addressed.